
真選組のクリスマス

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真選組のクリスマス

【Nコード】

N7387F

【作者名】

ミナクア

【あらすじ】

真選組はクリスマスイブも江戸を守るために働いています。彼らをつける謎の影の正体とは？

第一話（前書き）

銀魂の二次小説になります。

真選組メイン？

第一話

12月24日の江戸。年の瀬も迫り、かつ世間はクリスマスモード一色で賑やかである。しかし、真選組にとってはそんなのは関係は無い。夕刻から夜になり、闇が少しずつ深くなる江戸の平和を守るべく、今日も警邏をする。ちなみに本日の警邏組は近藤、土方、沖田、山崎の4人が組になり、身を切るような冷たい空気の中、街の平和を守るべく歩いている

近藤.. 「へくしょん！（ブルツと体を震わせる）」

山崎.. 「局長、ずいぶん可愛いクシヤミですね」

近藤.. 「そうか？・・・萌えるか？（鼻の下をこする）」

山崎.. 「萌えはしないですけど・・・」

近藤.. 「（鼻をすすり上げる）まあ、クシヤミひとつで萌えを表現できるのが局長のカリスマ性なのかも知れないな・・・自分で言うなってか？ははは。もっと萌えさせるために口癖に『うぐう』を入れたほうがいいか？」

山崎.. 「そんなことされても萌えないですから・・・」

土方.. 「近藤さん、ギャルゲネタもほどほどにしてくれ。しかもネタが微妙に古いぜ、が、がお」

近藤.. 「おめえもさりげなくギャルゲネタ入れてるじゃねえか。そ

れはいいとしてだ（腕を縮めてブルツと震える）・・・寒いな。夕方になるとやはり冷えて来るぜ。仕事とはいえ、厳しいよなあ。なあ、総悟（隣を歩く沖田に向かって言う）」

沖田・・「（不思議そうに近藤を見ながら）そりゃ寒いですがね・・・てか局長でもやっぱ寒いんすかい？意外だなあ」

近藤・・「へくしょん！（鼻をすする）何言ってやがる。寒いに決まってるじゃねえか。何でそんな事聞くんだよ？今日は最高気温がマイナスらしいしな。寒いに決まってるさ」

沖田・・「（懷に手を入れながら灯火が増えてきた江戸の通りを眺める）いやね、局長はケツ毛ボーボーじゃないですか。だからてつきり暖かいんじゃないかな」と思いましたね。」

近藤・・「（目を剥いて突っ込む）寒いに決まってるんだろ！つか、寒さとケツ毛関係ないから！毛深い人でも寒いものは寒いから！手の甲の毛がボーボーな、ぼかあ、幸せだなあ、っていう若大将だって冬になったら手袋してるから！毛深い、毛深くないは関係ないから！」

沖田・・「（真剣な顔で悩む）そうですかねえ。毛深い人のほうが寒さに強い気がしますよ。ほら（歩いている野良犬を指す）犬とか毛深いじゃないですか。裸だし。服も着てないし。でも寒がってないですぜ」

近藤・・「（目を剥いてry）犬と俺とを比べるなよ！そこまでボクじゃねえよ！何？お前この寒空の下、俺が裸で歩いても寒がらないって言うの？つうか、そんな真剣な顔で悩むようなことじゃないだろ！？普通に考えたらわかるだろ！」

沖田・・「(呆れたように)裸で歩くって・・・局長、この冬の時期に、しかも今さらストーリーキングなんて・・・別の意味でも寒いはずです。・・・って、我ながら上手いこと言うな。なんか心が暖まって来やせんか？」

第一話（後書き）

感想などありましたら・・・

第2話

近藤..「(目をry)いや、上手くないよ!暖まってきたのは心じやなくて、突っ込みのエンジンだけだから!お前が発言するたびにいい感じで暖まってくるから!俺の突っ込みのポテンシャルをいい感じで引き出してくれてるから! (突っ込み過ぎで肩で息をし始める) ハアハア...ていうか、体も暖まってきたよ!急に体が暖まったから太ももの辺りがかゆくなってきたよ! (ぼりぼりと掻く)」

沖田..「(土方の方を見やりながら) 土方サァン、局長が怒ってやすぜ。何か言ってやってくだせえよ。局長は気が短くていけねえや」

近藤..「お、お前が原因じゃないのかな、かな?」

土方..「(タバコに火をつけながら沖田を横目で睨む)...おい総悟。近藤さんを犬呼ばわりするたあ酷えんじゃねえのか?そらあ怒るのも当然だって話だ」

近藤..「トシ...。やっぱりお前えはちゃんと俺のことを理解して...」

土方..「(沖田の目を見据え、冷静に言う) いいか。近藤さんは犬じゃねえ。ゴリラだ。」

沖田..「なるほど。俺が勘違いしてやした」

近藤..「...ねえ〜っ!!!全っ然理解してねえ〜!!お前までそう言うのか!んじゃ何?お前らはゴリラと一緒に武州から江戸に出てきたのかよ!動物と一緒に江戸まではるばる旅をするっ

て、どこのハウス名作劇場のパチモンだよ！どこのフランダースの犬のパチモン？この場合、フランダースのゴリラ？もしくは、武州のゴリラか？最後は雪の降る中、レンブラントの絵を見ながら天に召されたりすんのかよ！パトラッシュ、僕もう眠たくなったよ、つてか！？パチモンすぎるだろ！」

沖田…「パチモン・・・あつ、あれですね、（とぼけた表情で）ピ
○チュウ」

近藤…「それはポ○モンだよ！○の意味ある？○つけてもバレバレ
だけどさ！」

土方…「まあそうツツコミを入れなさんな。冗談だよ。（ふう、つ
とタバコの煙をだす）しかし、局長も色々とおだ名がつくねえ。ゴ
リラにケツ毛。（くくく、といったずらっぱく笑う）愛されている証
拠だよ。いい事さ。実にいい事さ。（何度も頷く）」

近藤…「（少し落ち着いてくる）・・・そうなのか？あまりいい愛
称じゃない気がするんだが」

土方…「そんなことねえよ。人間味に溢れているから色んなあだ名
がつく。好きなものだからこそ愛称なんかをつけたくなる。俺なん
かは『土方さん』とは言われるが、もっと突っ込んであだ名をつけ
る奴はそんなにいねえ。怖ええのさ。怒らせたくないって感じでな。
誰も俺の心の中にまで踏み込もうとしねえ。まあ・・・（近藤さん、
俺の愛称はあんたがトシと呼んでくれるくらいだよ、と言おうとす
るが、照れるので言わないことにする）なんでも無えや・・・。つ
まりそういうことさ」

沖田…「・・・土方さんはいろんな人に憎まれていますからね。も

ともと恨みを買うような言動をしてるわけですし。汚いこともたくさんやっていますし。なにしろ鬼の副長ですから。恐れられはすれど好かれはしないでしょうね。仕方ねえことでさあ」

土方…「ふん…遠慮なく言うな…真選組を守るには、それが一番良いんだよ。（近藤さんが汚い仕事をして恨まれる位なら、真選組の汚れ仕事は俺が全部やってすべての恨みは俺が引き受けるほうがマシだ）」

第3話

近藤…「（土方の横顔を黙って見つめる）・・・トシ・・・わははははっ（土方の背中を叩いて、グッと肩を引き寄せる）なんだあ？お前愛称が欲しいって事か？それなら俺がいくらでもトシ、って呼んでやらあ。今まで通りにな。それともトッシーって呼んでやろうか？T・O・S・S・H・I、トッシーっ！」

沖田…「そりゃいいや。トッシーでいきやしよう。トッシー、焼きそばパンとジャンプ買ってこいや！」

土方…「・・・トッシーは勘弁してくれ。焼きそばパンとジャンプは自分で買いに行けよ」

近藤…「んじゃトシだな。愛称じゃ物足りねえ、ってんならまだお妙さんにも許していない俺

の唇を（そういつて土方の顔にキメ顔で近づき、土方の目を覗き込む。）、ほれ、お前にくれてやろうじゃねえか、ええ？お前の心ん中まで踏み込んでやろうじゃねえか。誰も踏み込んだことの無い、手付かずの部分までよ」

土方…「（近藤のキメ顔に一瞬ドキとするが、力いっぱい近藤の顔を押しのけながら、顔を背ける。それでも近藤、顔を近づけようとする。一進一退の攻防ッ！）俺はそんな趣味はねええっえええっ」

沖田…「まったく、天下の真選組の局長と副長ともあろう者が、江戸の往来のど真ん中で男色ですかイ。今時はBLっていうのかな・・・ま、とにかく仲が良いことで・・・しかも、クリスマスと来た・・・」

こりゃ萌えますぜ。ほら、通りを歩く人たちも振り返って見てや
ぜ。（そういつて往来の人たちを指し示す）誰もが振り返るお似合
いのカップル、って事なんでしょうねえ」

土方..「（なおも近づいてくる近藤の顔をなんとか突き放そうとし
ながら沖田に叫ぶ）お似合いじゃなくて異様だから振り返ってるん
だよ！俺はそんな趣味は無いっ！」

近藤..「ははは、照れるなよ、トシ。俺からのクリスマスプレゼン
トだ。遠慮するな。」

土方..「どこがプレゼントだっ！遠慮する」

近藤..「まあまあ。ちよつと乾燥してカサついている唇だがお前の
唾液が潤してくれるよな？（更に顔を近づける）」

土方..「（両手だけでなく、足も使って突き放そうとする）しつ
けえよ！近藤さん！（それでも近藤は顔を近づけてくる）総悟、お前、
止めねえか！」

沖田..「止めねえですぜ。土方さあん、局長がプレゼントをくれる
って言ってるんですぜえ。人の好意は素直に受けるもんでさあ」

土方..「てめえっ！好意じゃねえよっ！迷惑だっ！」

沖田..「迷惑ですかい？」

土方..「今の時期に耳ピンされるくらい迷惑だ。週刊少年ジャンプ
買ってきてくれて頼んだら、赤丸ジャンプを買ってこられるくら
い迷惑だっ！モンハンで生肉と間違えてシビレ生肉持ってくる奴く

らい迷惑だ！ガンダムVSで自分の味方をする乱入プレイヤーの機体がボールだった、ってくらい迷惑だから！ボールはいないけど。ともかくやめてくれええええ」

近藤…「（土方が元気になってきたのを確認する）そりやかなり迷惑だな・・・それじゃ止めてやるよ。（土方から離れ、普通に歩き始める）てかよオ、なんか暗い雰囲気になってきたから耐えられなくてついこんな行動にでちゃったよ。悪いな。ははは。トシよ、プライドが高いのはいいがそんな風に自分を孤独においこむんじゃないぞ。お前えは一人じゃねえ。俺たちがいるんだからよっ！（大笑いしながら土方の肩を抱き、揺さぶる）」

第4話

土方…「ちっ…（まったくこの人は…いつもこうやって場の雰囲気を変えてくれやがる。ま、そういう好漢だからこそ、俺や沖田は付いていくんだがね。）…まあいいけどよ。俺たちは警邏に来てるんだろ。こんなところで騒いでないで見回ろうぜ。今日みたいな賑やかな日こそ、攘夷派の奴らが暴れたりするってこともあるんだからよ」

近藤…「そういや今日はクリスマスイブか。どうりで街に音楽とカップルが溢れているはずだぜ。いやゝ華やかでいいよなあ。素晴らしいじゃねえか。こんな日に暴れる奴あ相当無粋だな。」

沖田…「そういや局長はクリスマスイブと一緒に過ごす人はいないんですかい？局長も夜に暴れたらいいんじゃないですか？違う意味で…お妙さんでしたっけ？それともギャルゲのヒロインが食事してるディスプレイを目の前において『一緒に食事してる風』なクリスマスですかい」

近藤…「どんだけ寂しいクリスマスだよ！お妙さんかあ。一ヶ月くらい前に誘ってみたんだ。『クリスマス一緒にどうですか？』ってな。そしたらよ、ニコニコしながら殴られた。」

沖田…「そりゃ災難で」

近藤…「んで、外せない用事があるって言われたよ。あの拳の感触、お妙さんの肌…よかったなあ」

沖田…「殴られても一応肌の触れ合いにはなりますがちょっと悲し

いすぜ。で、どんな用事なんすか。その外せない用事っていうのは？」

近藤…「ああ。確か・・・犬の散歩やら、買い物やら、クリスマス
のTVの歌番組を見たりとか、色々忙しいらしい。まあ年末だからなあ」

土方…「（近藤さん・・・それは・・・）」

沖田…「（避けられてやすねえ）」

山崎…「（避けられてますね・・・）」

近藤…「みんな暗い顔をするな・・・俺には・・・ギャルゲがあるから大丈夫だ。お妙さんはまだ落ちていないが、2次元の女の子は俺の魅力で落ちまくっているからな・・・バーチャルで恋愛術を磨き続けていればその技術はリアルの恋愛で発揮されると俺は信じている。というか最近も面白いギャルゲを買ったんだよ。今夜はやるよ。とことんな」

土方…「近藤さん・・・現実逃避かい」

近藤…「俺にはクリスマスは関係ねえんだよ。（思いついたように）そうだ、今日くらいは家族もちの隊士達は家に帰してやってもいいかもしれないな・・・年末も近いしこういうイベントを家族と一緒に過ごすのは大事なことだろうさ。どうだ。トシ？」

土方…「ああ。こういう日くらいはいいんじゃないか。緊張しっぱなしって言うのもいけねえ。士気を高めるには効果的だな」

近藤..「よし。善は急げっていうしな。誰がひとつ走り行ってくれるか」

山崎..「手を上げる。その手にはなぜかミントンのラケットが・・
・」それじゃあ僕ががひとつ走り行って来ましようか。」

土方..「(ラケットを見る)てめエツ！仕事サボって遊んでんなつ。
そんな野郎、肅清してやるっ！」

山崎..「(ラケットを後ろに隠す)これは違うんですく。こういう
うキャラだから」

沖田..「あれ、山崎さん、いたんですかい」

山崎..「ええっ・・どうせ僕は地味な男ですよ。でも、いたんです
かいはないでしょう。駐屯所を出るときから一緒じゃないですか。
最初の方、頑張って話をしたじゃないですか・・。」

近藤..「そう拗ねるな。地味だから監察方(隠密)として役に立っ
てるんだ。その地味さは賞賛に値する。単なる地味でなく、地味ス
トだ。最上級だぜ」

第5話

山崎…「近藤さん・・・ありがとうございます。僕が駐屯所まで行って伝えてきます。ではっ（なぜかカバディカバディと呟きながら駐屯所に踵を返そうとする）」

近藤…「いや、山崎。待て。その前にケーキ屋に行くぞ」

（近藤、通りにケーキ屋「エンジェルモール」を見つけ入る。店の中はお客さん、ウェイトレス、レジにサントアの格好をした店主らしき人物がいる。）

山崎…「近藤さん、急にどうしたんですか？」

近藤…「隊士たちにケーキを買ってやる。それを駐屯所に持って行ってくれ。家に帰すだけっていうのも芸がねえからな」

山崎…「そういうことですか！わかりました」

近藤…「親父、ケーキを百個ばかり見繕ってくれ」

ケーキ屋の店主…「あいよ・・・って真選組の近藤さん？」

近藤…「長谷川さんじゃねえか。今度はここで仕事かい」

長谷川…「ああ、前の仕事が首になってな。夜のかぶき町でキャバレーの呼び込みをしてたんだが、流石にサングラスで何も見えなく

てな。客引きもできねえ。仕事しねえなら来るなって言われて（首を切る真似をして）、これさ」

近藤…「夜にサングラスじゃ何も見えねえだろうさ。」

沖田…「（いつの間にか土方と一緒に店に入ってきている）サングラスは長谷川さんの動力源っすからね。いや、江戸の動力源ですぜ。それがないと、動きが止まりまさあ。だからどんな時でも外さないんですよ。」

長谷川…「・・・また面倒くさいのが増えたな。俺のグラサンをラピュタの飛行石みたいに言うなよ・・・で、あんたら何しに来たの？ ケーキを買いに？ それとも御用改めなんかかい？・・・（土方が店のドアを閉めていないのに気付く）ていうか早くドア閉めろよ！ 暖房効かせてんだから！ 冷たい空気入ってきたらグラサン曇るだろ！ また何も見えなくなっって首になるだろ！ この年の瀬に仕事もなく放り出されるのはつらいから！」

沖田…「土方さん、早く閉めねえと江戸が墜落しちゃいますぜえ。グラサンが機能不全を起こしてますんで」

長谷川…「だからさ、これ飛行石じゃないし。天空の江戸じゃないから。て言うかあんたらケーキ買いに来たんだろ。さっさと買って帰っちゃってよ、頼むから。他にお客さんいるんだからさ」

近藤…「そうだったな。長谷川さん、ケーキを百個ばかり見繕ってくれ。（財布を出す）幾らだ？」

長谷川…「量が多いんでちょっと時間を貰わないといけないな。値段は・・・1両くらいだな」

近藤…「前払いだ。とっておいてくれ・・・ところで長谷川さんは今日、一緒にケーキを食う相手はいるのかい？」

長谷川…「(自嘲気味に) この年で定職も無くふらふらしているような男に惚れる女がいると思うか？俺は天涯孤独でいいんだよ。」

近藤…「(ふっと笑う) お互い孤独だな。俺も一人だ。やはり俺は2次元に生まれてきたほうが良かったのかもしれない・・・」

(二人、カウンター越しにお互いの顔を見合う。どちらともなく握手を求める。そこには不思議な男の友情が・・・)

沖田…「まあ、要するに二人とも甲斐性なし、ってことでさあね」

土方…「・・・相変わらずのドS発言だな・・・一言で突き落とす瞬発力が容赦ねえ」

(・・・芽生えそうだったが、あっさりその芽は摘まれた)

第6話

近藤…「まあとにかくだ、注文したケーキのうち、ひとつはあんたへのクリスマスプレゼントだ。仕事が終わったら持って帰ってくれ。」

長谷川…「近藤さん・・・すまねえ」

近藤…「何、いいってことよ」

長谷川…「もうひとつ頼みたいことがあるんだが」

近藤…「ん??」

長谷川…「・・・その・・・ケーキを2個くれねえか?・・・今は別居してるが、妻に一個送りてえんだよ。こんなざまになっちまったが、やっぱり俺ああいつを愛しているしな。こんな日に電話の一本だけってのは甲斐性なし過ぎる。俺なりに出来ることをやってやりたいんだよ」

近藤…「・・・判った。長谷川さんはいいな・・・そういう女性ひとがいてよ・・・山崎、ここに残って、ケーキが出来たら駐屯所に持って行ってくれ。くれぐれも伝えてくれよ。ケーキを持って、家に帰って家族サービスをしろ、と。あと、彼女がいる奴も同様に帰っていいからな。よいクリスマスを迎えてくれ、と伝えといてくれ」

山崎…「わかりました」

近藤…「じゃあな（背中越しに手を上げて、格好良く店を出る）」

土方..「(何も言わず軽く頭を下げる)」

沖田..「じゃあな、マダオ」

長谷川..「・・・マダオ言うなっ!!」

(店の外、近藤、土方、沖田は再び警邏を始めるため、歩き出す)

近藤..「(真剣な顔になる)ずっと後ろをつけられているな・・・
山崎がうまいこと駐屯所に戻ってくれればいいんだが。」

土方..「(タバコに火をつける)近藤さん、あんたも気付いていたかい。人が悪いねえ。駐屯所をでてきらずっとついてきてるぜ」

沖田..「俺も気付いてましたよ。俺なんか真面目な男なんで気づいていない馬鹿の振りをするのはすごく大変でしたよ。」

土方..「嘘だっ!!(ひぐらし風に)めちゃくちゃ自然だったじゃねえか・・・。しかし、攘夷派の奴らが江戸に入り込んできている、っていう情報があったが・・・もしかしてそれと関係があるのか?」

近藤..「そうだな。ま、しばらく俺たちの後をつけさせるさ。」

第7話

（一方、ケーキ屋にいる山崎）

山崎…「長谷川さん、なんだかトイレに行きたくなっちゃいましたよ。トイレはあるんですか？」

長谷川…「ああ、あるにはあるが・・・従業員用だな。お客さん用はないんだよ。使うのかい？」

山崎…「それで問題ないですよ。借りますね。ケーキはまだまだ時間かかるんでしょう？」

長谷川…「そうだな・・・まだかかりそうだな。」

山崎…「わかりました。（トイレに向かいながら）もし僕が戻ってこないときは、長谷川さん、ケーキを駐屯所に配達してもらってもいいですか？」

長谷川…「戻ってこない？なるほどね。わかったよ」

山崎…「・・・さてと。出口出口と・・・（小窓を見つける）ここからでるか・・・」（小窓をよじ登り、外へ出て、真選組駐屯所へ向かう）

（一方、近藤達。巡回をしばらく続けてかぶき町付近に到着。）

近藤…「このあたりも巡回ルートだから見回るぞ」

土方…「マジかよ？別に見回らなくてもいいだろう。だいぶ遅い時間だぜ。クリスマス特番見たいしよ」

近藤…「遅い時間だからこそ見回るんじゃないか。それにずっと後をつけている奴も全然何もしてこない。出方を見ないといけねえかな」

沖田…「これは俺の勘ですがね・・・後をつけている奴は、もしかしたらストーカーなんじゃないですか。万事屋の旦那を付回す女とか、お妙さんを付回す局長みたいなやつが・・・」

近藤…「俺はストーカーじゃ無えから！」

沖田…「じゃあ何ですか？」

近藤…「そうだな・・・お妙さんを離れた場所からそつと見守るシヤいなあんちくしょう、と言ったところだな。まあ、あまりにシヤイすぎて、時にはお妙さんに迷惑をかけてしまうこともあるがね」

土方…「まんまストーカーじゃねえか。てかよお、後をつけられても別に害を加えてくるわけじゃねえんだし、もうこのまま駐屯所に帰ってもいいんじゃないのか？」

近藤…「なんだ、トシ？さっきからずいぶんと駐屯所を恋しがっているようだが？」

沖田…「ちがいますよ、近藤さん。この辺は万事屋の旦那が出没するからでさあ。」

近藤..「旦那？ ああ、銀時か」

沖田..「土方さん、旦那とは相性が良くねえみたいだから。士郎とアーチャーの関係位にね」

土方..「例えがおかしいだろ！ つか余計なことを言うんじゃないよ。」

沖田..「旦那に会っても構わないでしょう。それで土方さんがストレスを溜めて倒れてくれたら、俺に副長の座が転がり込むっていう寸法ですがね・・・」

土方..「かぶき町に入ってからゆっくりと歩いていると思ったら、奴に遇わせようって寸法か？」

沖田..「そんなことはないですぜ。普段どおりの早さでさあ。いつもこんなもんじゃねえですか」

土方..「ま、別にいいけどよ。ここで銀時に合うって事はだ、当然おまけがついてくるよな。」

第8話（前書き）

今回ちょっと下ネタあります・・・

第8話

沖田…「おまけですかい？」

土方…「お前の天敵の神楽だ。俺も嫌な気分になるがお前も同じだ。俺あただじゃ転ばねえぞ」

沖田…「（ポンと手を打つ）なるほど。土方さんを追い詰めることばかり考えて、その可能性をぜんぜん考えてませんでした」

土方…「てめ、ドンだけSなんだよ！！んでもって、いきなり歩くのが早くなってるじゃねえか！つか、それもはやダッシュだろうよ！！！」

沖田…「（後ろを振り返りながら）何言ってるんですか。普段どおりの早さでさあ。土方さんはそのペースで警邏を続けてくだせえ」

土方…「自分だけさっさと出るつもりかよ！待ちやがれ！（沖田を追いかける）」

近藤…「（二人に着いて走る。腕を組んで考え込みながら）しかし万事屋は何をやっているんだろうな。あいつがどういうクリスマスイブを過ごすのか想像もつかねえな。」

土方…「別に想像したかねえよ。てか、近藤さん、そんな姿勢で走れるって、どんだけだよ！」

沖田…「想像する必要はないですよ。直ぐわかりますよ。新八君と神楽の奴と一緒にすぜ」

土方..「なんでわかる？江原か、お前は」

沖田..「だってほら、そこにいるじゃないですか」

土方..「そこにつて・・・（銀時にぶつかる）ててて・・・痛えじやねか！どこに目をつけて歩いてんだ！」

銀時..「なんだあ？てめえからぶつかっておいて文句たれるたあ、真選組の副長は当たり屋にでもなっちまったかあ？てか師走だけに走ってます、っていうようなべたなギャグを身を持ってやってくれてたんじゃないだろうな？努力の割には報われないこともあるんだからな。特にそれ系のギャグは」

近藤..「万事屋じゃねえか」

銀時..「近藤さん。こんばんは」

近藤..「おう。メリークリトリス。」

沖田..「旦那。メリークリトリス。」

銀時..「おう。メリークリトリス。」

新八..「ちょっとやめてくださいよ！！メリークリスマスでしょうが！一応全年齢対象なんですから、下ネタは控えてください！何考えてるんですか！しかも3人とも綺麗に字数を合わせてるじゃないですか！どんだけシンクロ率高いんですか！！サードチルドレン並じゃないですか！」

神楽…「やれやれ。相変わらず真選組は下品アルな。どんだけ頭の中エロでいっぱいなのか、わからないネ。この年末のあわただし時期に、エロあるか。エロアワってやつアルか？特にそのいつもアイマスクしてるチビ。馬鹿丸出しアル。アイバカアルね」

沖田…「大人のエロスもわからない子供がよくいうなあ。そのぺったんぺたぺたつるぺったんな胸もんで、チチでかくしてやろうか？乳首をもぎとって、2個ともデコにつけて頭の点々がちよつと足りないクリリンみたいにしてやろうか？」

神楽…「やってみるアル。そんなことしたらお前のチンチン引きちぎって、頭につけて、触角が一本足りないナメック星人みたいにしてやるアルよ」

沖田…「残念だな。ナメック星人には最初から一本しか触覚がない奴もいるんでね」

第9話

新八…「だから止めてくださいってば！二人とも何ノリノリで下ネタ言ってるんですか！さっき控えてください、っていったのは本当に控えてください！ってことですから！お笑い芸人が『押すな』って言ったら『押せ』っていう意味ですけど、僕が控えてくださいっていったのは、どんどんやれ！っていう意味じゃないですから！てか、あんたらなんで相手の胸とチンチンをもみ合ってるんですか！本当にやる気ですか！引きちぎる気ですか！」

神楽…「当たり前ネ。どんなときでも全力投球。それが私あるヨ。でもこいつには5%くらいの力で十分アル。しょせん消費税程度ネ」

沖田…「俺もそうですぜ。こいつが突っかかってくるから軽く遊びの相手をしてるだけでさあ。この程度の相手にや本気を出す価値はねえですぜ。おれなんざ3%でさあ。5%に上がる前の消費税程度の力でさあ」

新八…「とか言いながら二人ともすんげープルプルしてるんですけど！っていうか、肉のつぶれるメリメリって音がこまでするんですけど！どう見ても150%くらいの力使ってるんですけど！近藤さん、二人を止めてくださいよ！」

近藤…「いやゝ。新八君の突っ込みは年末でも冴えてるねえ。いやね、自分も最初のほうで結構突っ込みいれる役をやってるんだよ。でもやっぱり新八君には負けるなあ。」

新八…「感心してる場合ですか！」

近藤..「さすが俺の将来の義弟だ」

新八..「あんたを兄とは認めないから！ちょっと、二人ともやめてくださいよ！（沖田と神楽の間に割って入る）」

神楽..「ちっ、新八のおかげで命びろいしたアルな。新八がとめてなかったら、年末のダウンタウンの笑ってはいけないうを見れない体になってたところネ」

沖田..「てめえこそ、年末の紅白を見れない体になるところだったぜ。それどころかちょうど新年に変わる0時にジャンプして、年が変わる瞬間に地上にいなかったって言えない体になるところだったな」

神楽..「ふん、それが本当なら怖いアルが・・・どうせハッター君アルよ。ニンニン」

新八..「・・・あんたらバカだろ！クリスマスイブにたまたま出合ったんですから、今日くらい仲良くしてください！」

近藤..「こいつらは宿命のライバルだからな。（相手にしていたら話が進まないの、話題を変える）しかし、新八君、こんな夜に一体何をしてたんだ？」

第10話

新八…「ああ。銀さんがジャンプを買いに行きたいって言ってたんで一緒に行ったんですよ。こんな時間も警邏って…何かあったんですか？」

近藤…「いや、特に事件はないんだが…実はな、攘夷志士たちが江戸に多数入ってきているという情報があつてな。テロの噂が流れているんだ」

新八…「このクリスマスイブにですか」

銀時…「（鼻をほじりながら）まあ、祭りが好きな攘夷志士っていうのもいるからなあ」

新八…「それってもしかして…」

近藤…「あくまで噂だよ。高杉が来ているんじゃないかという話だ」

新八…「…銀さん、暢気にジャンプなんて買ってる場合じゃなかったですね。襲われたりしたら」

銀時…「…別にいいじゃねえか。俺らがどうこう出来るわけもなし。それに今週のジャンプは麦わらの話が盛り上がってるし、巻末のジャガーさんが先週から面白くて、早く読みたかったしな。ハマーがいい味を出してるんだよ。あのダメ人間っぷりが最高じゃないか。あと久々掲載の適当な絵のハンター×ハンターも見たいんだよ」

新八…「（あまりにのん気なのでおもわず怒る）あんだジャンプと命どっちが大事なんですか！」

銀時…「でけえ声だすなっ！両方大事だよっ！」

新八…「あんたもでかいよっ！両方大事？ずいぶん安い命だな、おい！230円程度の命ですか！」

土方…「（二人のやり取りを見ていたが呆れたように口を挟む）ていうかよお、お前さ、クリスマススイブだろ？何でジャンプなんだよ。もっとましな過ごし方とかあるだろうがよ」

銀時…「マヨネーズを食いすぎて頭が腐っちまった奴にはわからないかもしれないが、何のイベントもない平日に読むジャンプもいい。しかしクリスマススイブみたいなビッグイベントの日にジャンプを読むってのは最高の過ごし方だ。同じ内容でも面白さのレベルが違うんだよ。本当のジャンプファンっていうのはクリスマスだろうがバレンタインだろうがテロがあらうがまずジャンプを優先するんだよ。・・わかるかね。てか声が小さいよ、多串くん」

土方…「多串じゃねえ」

新八…「ま、いいですけど。人が心配してるのに・・」

（その様子を見ていた、真選組をずっとつけていた男が無線を使い、何事か報告をする）

男…「武市様、真選組と万事屋が合流しました。」

武市…「長かったですね。・・・しかし、予想通りの展開です。で、ケーキ屋に入った方はどうですか？真選組の山崎は？」

男2…「現在ケーキ屋入り口で見張っていますが出てきた様子はありません。おそらくまだ中にいるものと思われます」

武市…「そうですか。それならば来ることは無い。大丈夫でしょう。そろそろ動きましようか」

来島…「ようやくっスか。ようやくあんたと別行動を取れるッスか。せっかくのクリスマスイブにこんな辺鄙な隠れ家ですつと変態と一緒にいるのは勘弁して欲しいっスからね」

武市…「変態とは失礼ですねえ」

来島…「黙れ、ロリコン」

武市…「・・・ま、それはおいておきましょう。（来島…否定しないのかよっ！）そろそろ奴らを別の場所へ誘い込む作戦を開始しなければいけませんね。いつまでも路上で立ち話をしてくれるほど時間は余っていません・・・（別の無線に向かって話しかける）河上さん、よいですか？」

河上…「準備おkでござるよ。しかし、本当にこんなので大丈夫なのでござるか？真選組と万事屋を一度に集めるなんて」

武市…「鬼兵隊随一の頭脳を持つ私の言うことを信じなさい」

来島…「自分で自分のことをお高く評価するやつなんてろくな奴がいないっスよ。お前の評価

はロリコン！これはあんたじゃなく周りの人間が言うんだから、それが本当のあんたっスよ！（無線を奪い取って）そうっすよね？」

武市…「これだから猪女は・・・」

来島…「な、な、なんスカ！その言い方は・・・変態ロリコンのあんたにそんなこと言われる筋合いはないッスよ！」

河上…「やれやれ・・・またでござるか・・・拙者は勝手に進めさせてもらうでござる。カラクリを使って奴の持ち物を取れってことでござろう？で、それを追わせるということでござるな」

（そう言って人型タカラクリを操作するリモコンを動かし、銀時に近づく）

第11話

銀時…「(さっきの話を続けている)新八よ、俺の心配をしてくれるのか?」

新八…「ええ。そりゃまあ心配しますよ。また大怪我して入院なんてされたらこっちは困りますよ。ただでさえ万事屋の仕事が無いんですから、入院費をひねり出すだけでも大変なんですからね。」

沖田…「そうですぞ、旦那。この新八君、旦那の入院費を稼ぐために色々苦勞してたんですぞ。好きでもない男に抱かれたり、お金のために笑顔を作ったり・・・新八君の苦勞をあんたはぜんぜんわかつちゃいねえ」

銀時…「なっ、・・・新八、お前そんなことをしてまで俺の入院費を稼ぎ出してくれたのか・・・」

新八…「するわけないでしょう!僕の純潔はお通ちゃんのためにとっておくんですから!」

神楽…「男は馬鹿な夢を見るアルな。お痛ちゃんに純潔を捧げるなんて。多分今頃別の男とお楽しみの最中あるよ。・・・DORAE MONだっけ?(銀時…GEMONだ)そうそう、そのGEMONと多分あんなことやこんなことしてるアルよ。馬鹿な夢見てたって10年後思い返したら顔から火が出るネ。ま、このままそんな願望を持ち続けたら一生童貞アルな。30過ぎて童貞だと魔法が使えようになるらしいアル。本当の魔法使いが近くにいれば、それだけでTVとかショーに引っ張りだこで、ギャラがすごいことになるネ。お痛ちゃん様様ね。銀ちゃん、働かなくてすむアルな。新ち

やんが食わせてくれるネ」

銀時…「そうなるとうれしいが、神楽、魔法なんてものはこの世には存在しない。残念ながら新八は病氣なんだ」

神楽…「病氣アルか？」

銀時…「そう。厨二病、って奴だな」

新八…「僕のことなんてどうでもいいでしょう！ていうか神楽ちゃん、お通ちゃんだから！お痛、って何アイドルを痛い人みたいに言ってるんですか！」

神楽…「歌聴いたことないアルか？痛い人アルよ？」

新八…「痛くないから！いい曲ばかりだから！」

土方…「（万事屋の連中の会話にあきれたように）・・・たく、万事屋の連中ってのは本当に馬鹿ばかりだな・・・近藤さん、総悟こんな馬鹿たちは放っておいて巡回を続けましょうや。・・・ってなんだ？あのカラクリは？」

第12話

（河上の操作するカラクリが銀時に近づき、ジャンプを奪って逃走する）

銀時…「ん？・・・カラクリがどうかしたのか・・・（手に持っていたビニール袋が無くなっているのに気付く）って・・・何だあ！あのカラクリ！俺のジャンプを盗んで逃げやがった！真選組、頼む！」

土方…「なんだよ？たかがジャンプだろ？財布じゃなくて良かったじゃねえか。もつとも、お前が大金を持ち歩いているわけないか。とりあえず巡回に戻るわ。じゃあな。万事屋（歩き出す）」

銀時…「馬鹿か！大金なら股間に二つもあるっての！」

近藤…「そうか。では万事屋、よい年末を」

沖田…「失礼しやす。旦那。よいお年を」

銀時…「てめえら警察だろうが！目の前で引ったくりが起こったんだぞ！！追いかけてねえか！」

土方…「（振り返る）ああ？たかがジャンプの一冊や二冊じゃねえか。それ位いいだろうがよ。もしかしたらあのカラクリも何か理由があって仕方なく盗んだのかもしれない。病気の母親を勇気つけるために枕元で朗読するためとか、暖を取るために盛大に燃やすとかよ。んで、炎の中には最高級のボルトやハイオクエンジンの幻が浮かんだりな」

銀時…「マツチ売りの少女かよ！」

土方…「とにかくだ、お前えにはカラクリに対する優しさっていうものがないのか？」

銀時…「カラクリには病気の母親もいねえし、暖をとる必要もねえから！　ったく…使えねえ警察だぜ！　仕方ない…新八、神楽、行くぞ」

神楽…「えゝゝゝ？　もう寒いから早く帰りたいアルゝ。てか私ジャンプ読まないから関係ないアルよ」

新八…「そうですね。一応お風呂も沸かしてるし…そろそろお湯があふれ出すところですしね」

銀時…「薄情だな！！　オイ！！　あのな、今週のジャンプにはな、お通ちゃんのインタビュ―が載ってるし、あのカラクリが持っていたビニール袋の中にや、ジャンプだけでなくハーゲンダッツの大きいサイズのアイスも入れてるんだよ！　新八、お通ちゃん好きだよな？　神楽、寒いなかであえて冷たいアイスを食べるのが最高アル！　って言ってたよな？　風呂上がりには食べるアイスは美味えぞ。それでもお前らいかねえつつてのなら、とっとと帰って寝てるんだな！　その代わり、ジャンプは読ませないし、アイスも俺が食う！　俺は行かせてもらおうぜ！」

新八…「何だって…（突然お通ちゃん応援衣装に着替え始める）真選組のみなさん、あんたらの事、見損ないましたよ！　警察でしょ！　僕は銀さんの後を追います！　この薄情者！（走り出す）」

神楽..「私も行くアル！見損なったアルよ！ゴリラ！ネクラ、ドS！死ぬアル！サダハル、行くよ！（サダハルの背中に飛び乗る）」

サダハル..「オン！（走っていく）」

（真選組、万事屋の後姿を見送る）

近藤..「目茶目茶言われてたな」

沖田..「行っちゃいましたぜ」

土方..「ああ」

沖田..「本当にいいんですかい？カラクリを追わなくても？一応盗難事件ですぜ」

土方..「俺たちが今一番気にしなきゃいけないことは何だ？攘夷組が江戸に乗り込んできている。更に後ろから俺たちをつけてきている連中がいる。この二つに関連性が無いと断言できるか？俺の見込みではつけてきている連中はおそらく攘夷志士と関係があるはずだ。・・・（後ろを振り返り尾行する連中がいるほうへ向かって）なァ、そうだろ！？」

（さっきまで尾行していた連中の姿はすでにない）

土方..「（くわえているタバコを落としそうになる）あれ？・・・どこへ行きやがった？」

沖田..「さぁ？俺もさっき見たときにはすでにいませんでしたぜ？」

土方…「ちっ！万事屋と時間を無駄にしている間に消えたか・・・」

（そのとき、遠くから女性の声がする）

女…「キャ～～～～！！泥棒よ～～！誰かそのカラクリを捕まえてえ～～！！！」

近藤…「（コーディネーターっぽい種割れ演出）むっ！！あの声は・・・間違いない！！ラクス・・・」

土方…「（すかさず突っ込む）なわけねーだろうが！あっちから聞こえたぜ」

近藤…「お妙さんだ！間違いない！お妙さんの声は小型MP3プレイヤーでこっそりと録音して毎日寝る前に聞いているからすぐわかる。」

土方…「ストーカーじゃねえか！」

近藤…「ちなみにパソコンのOSの起動音もお妙さんの声に変えている。色っぽい部分をな」

土方…「それも救いようのないストーカーじゃねえか！」

近藤…「真選組のパトカーの音もお妙さんのハアハア言う声にしようかと・・・」

沖田…「（近藤に向けてバズーカーを向けながら）局長、それは勘弁してください。」

土方…「俺も珍しく総悟の意見に賛成するぜ（刀を近藤の首近くに押し当てる）」

近藤…「判った。二人とも落ちけつ。いや、落ち着け。その案は引っ込めよう。しかし、なぜお妙さんの声が・・・（そう言って声のするほうへ走っていく）」

お妙…「（走り去るカラクリを追っている）誰かっ！そのカラクリを捕まえてちょうだいっ！」

近藤…「やはりお妙さんだ。おっっいっ（お妙に追いついて話しかける）どうしました？お妙さん？」

第13話

お妙…「（驚いた表情になる）何！？ゴリラが話しかけてきたわ！ゴリラが人語を解するっていうの！？ここは何の惑星？」

近藤…「ゴリラじゃないですよ！近藤ですっ。真選組の近藤ですよ！よく見てくださいっ！」

お妙…「あら、近藤さんでしたか？夜も更けてきたのでつい見間違えちゃいました。ごめんなさいね」

近藤…「いつもの事です。気にしてませんよ。それより一体どうしたんですか？カラクリが何か悪さをしでかしましたか？」

お妙…「そうなのよ。私が今日洗濯して外に干していた・・・その・・・なんていうの・・・ぶ、ブラジャーを盗もうとしているのを見つけて・・・だから今追いかけていたの！」

近藤…「な、な・・・ぶ、ぶ、ブラジャーですとお～～～！！！！（背景が宇宙になり、惑星達と共に浮かぶ純白のブラが浮かぶ。その中を宇宙服を着た近藤がそれに手を伸ばしゆっくりと近づいているイメージ映像が流れる）」

お妙…「（近藤に向かって走りながら）なんてイメージ映像流しとんじゃあ、ごらああああ！この変態ゴリラっ！！（顔面にパンチを入れる）」

近藤…「うぼおっ！！！！何でわかったんですか～～～！？（吹っ飛び、地面に倒れるが、その顔はまだイメージの世界を引きずり笑顔

を保っている)」

お妙..「汚らわしい！男なんて汚らわしいわっ！特にこのゴリラっ！（倒れている近藤を何度も足蹴にする）このこのこのこのこのの！！！！げしげしげしげし！！・・・はあはあはあはあ」

沖田..「（お妙に近づく）ちょっとお妙さん、やりすぎじゃありませんか？仮にも真選組の局長ですぜ・・・（そう言って近藤を助け起こす）大丈夫ですかい？局長？」

近藤..「（ぼこぼこになった顔を上げ、グッと親指を立てる）は、はいひょうふら（大丈夫だ）」

沖田..「（その顔を見て）誰です？あんた」

近藤..「ほ、ほんとうちん、ぴんぴっ（近藤ちん、ぽんちっ）」

沖田..「こんなところでギャルゲの真似始めるなんて・・・しかも『ぴんちっ』を『ぽんちっ』ってギャルゲーマニアの近藤さんらしからぬ失敗まで・・・こりゃ相当錯乱してますぜ・・・殴られたせいでおかしくなりやしたか？・・・いや、もともとおかしいか？」

近藤..「（プルプルしながらも立ち上がり）らいじょうぶ・・・ほれより、ほうぞ（それより追うぞ）」

土方..「ちっ、そこまでボコボコにされてそんなこと言うのかよ。ほっときやいいだろ。自分でなんとかするだろ。ブラくらい。真選組局長より強えんだからよ。・・・たく、万事屋関係の人間に関わるとろくなことがねえぜ（ていうか、この女、どうしても外せない用事があるって言ってたくせに、暇そうにしやがって）」

近藤…「（口調、戻る）違うぞ、トシ。どんなに強くてもお妙さんは女性だ。こんな夜中に歩くのは危険だ。しかも逃げた方向は人通りが少ないんだぞ。誰に襲われるか分からないだろう」

土方…「逆にあんたが襲われてるじゃねえか。他人の心配より、自分の心配をしろよ」

沖田…「そうですね。そもそも可憐な女はこんなに人を殴ったりしませんぞ。俺たちが行く必要ないでしょう」

近藤…「俺は大丈夫だ。（そう言って、お妙のブラをとったカラクリを追いかける）いくぞ。困った人を助けるのが俺たち警察の義務だ。そして窃盗犯は社会に迷惑をかける存在だ。必ず取り押さえなければいけない。・・・別にお妙さんのブラが見たいって言う下心じゃないからな」

土方…「別にそんなことは聞いてないだろうが・・・俺はあんたに従うだけだ。それが任務のためだろうが、ブラのためだろうがな。逃げたのはあっちだろ。行こう」

近藤…「すまねえ」

沖田…「万事屋がジャンプを取られたときはスルーしてたくせに。同じ人のセリフとは思えませんぜ。万事屋のほうは行かなくていいんですかい？」

近藤…「奴は男だ。男は自分のケツは自分で拭くもんだ。紙がなければ、紙やすりを使ってでも拭くもんだ。万事屋に限って心配はない・・・それじゃお妙さん、ちよっくら盗られたものを取り返しに

言ってきますね。あ、ちなみに俺はとっくの昔にお妙さんに盗られてますから・・・心をね（そういつて走り去っていく）」

沖田..「やれやれ、仕方のない人ですぜ。ブラのためとはいいながら・・・しかも決め台詞がアニメのパクリとは恐れいりやすぜ（そういういながらも近藤の後を追っていく）」

お妙..「近藤さん・・・（後姿を見送る）」

第14話

（近藤、土方、沖田はカラクリを追う）

近藤…「カラクリが出てきたのと時を同じくして尾行していた連中が消えた。何か関係があるのかもな」

土方…「ま、関係あるかないかはとっ捕まえてから吐かせるさ」

（カラクリ、次第に海岸通りへと逃げていく。冬の夜の海の音が静かに聞こえる港でカラクリに追いつく。コンテナと巨大な倉庫がある、いわゆる教科書通りの港）

近藤…「（立ち止まっているカラクリに向かって）・・・そこまでだ！！窃盗犯、ブラを返してもらおうか！俺に渡せ・・・ブラをよこせええええええ」

？…「（カラクリの後ろの暗がりから姿を現す）ふっふっふっ、やはり事前のデータとおりですね。あなたはどこまでも奇妙という女を好きらしいですねえ。（無線に向かって）河上さん、ありがとうございます。ございました。あなたが上手いことカラクリを操ってくれたおかげで、ちゃんと予定通りの場所にみな、集まってくれましたよ。後は私の仕事です（そう言って無線を切る）」

土方…「てめえは・・・武市か！？（刀を抜く）」

武市…「おや、私の事をよくご存知で。・・・それにしても挨拶もそこそこにいきなり抜刀ですか。いやいや、実に好戦的な人ですね

え」

沖田…「ブラのことはどうでもいいが、目の前に攘夷志士の首魁のひとりがいるのを黙って見過ごすわけにはいかねえなあ（そう言つて刀を抜く）」

近藤…「沖田よお、ちよつとばかりブラのことも気にしてくれや（虎徹を抜く）」

武市…「ふう、怖い怖い。あなたたちのような腕の立つ侍を相手にして私がかなうはずもないですね。そうなるとあなた達を上回る戦力が必要になってきますね。数をそろえて、戦力を整える。万全の体勢で出迎えるとしましようか。」

（そう言うと、武市の後ろから十数人の武士と、一人だけ周りと威圧感の違う武士が出てくる

第15話

岡田…「岡田似蔵だ。（鼻洗淨薬を吸う）あんた方が真選組の幹部連中かい。（そっくりながら音もなく近づいてくる）・・・なるほどなるほど、目の見えねえ俺にもわかる。相当できるねえ。あんたたち。」

土方…「なんだあ、てめえは・・・人斬りかい」

沖田…「聞いたことありやすぜ。『人斬り似蔵』っていやあ、京都、江戸あたりで有名でしたね。」

近藤…「・・・こいつか・・・なんとなく覚えはあるな（そう言つて岡田に対して刀を向ける）」

岡田…「そうだな。人斬りだ。ただ切るだけじゃないぜえ。最近はお部下に斬らせたりもしてるなあ・・・自分で斬るのも楽しいが、斬られているのを見るのも好きになってきてよお。目は見えねえが、人斬りつてのは奥が深いぜえ」

近藤…「御託はいいからかかってきやがれ。」

岡田…「近藤か・・・相手になってもいいが（そう言つて刀を構える）俺だけに気をとられるとやばいことになるかもよお・・・」

土方…「・・・！！（背後からの小さい足音に気付き振り向く。近藤に向かつて、刀を振り上げている敵の兵がいるのに気付く）近藤さんっ、危ねえっ！！」

（土方、近藤と背中合わせになりながら敵の攻撃を受ける）

岡田…「（感心したように拍手する）おおお、すごいねえ。この暗い中で少しの気配に気付くとは。こうでなくちゃいけない。」

土方…「（敵の一撃を跳ね返し、刀を正眼に構える）・・・背後からとは汚ねえじゃねえか。てめえ、人を斬ればどんな手段でも構わねえみてえだな。」

岡田…「その通りさね。人斬りっていうのは生き残った者が正義で、死んだものが悪なのさあ。・・・こんな風になあ（軽くあごを振る）」

沖田…「土方さん、横だっ！」

土方…「（正面の相手に気を向けてすぎていたため、横の暗がりから音もなく出てきた敵に気付くのが一瞬遅れる）・・・ちっ！！」

沖田…「（近藤と土方が背中合わせになっている隙間から抜刀しながら飛び込む。土方を横から斬ろうとした攻撃を防ぐ）・・・ふうっ、あぶねえなあ。・・・いや、ここは土方さんが斬られるのを見過ごして、俺が次期副長につくようにしなきゃいけないかったかなあ（そういつて敵の攻撃をおしかえす）」

土方…「馬鹿いいやがれ。てめえにはまだ早えよ」

（近藤、土方、沖田、3人がほぼ背中合わせになる。）

第16話

岡田…「ふははは。すごいなあ。俺の部下たちはね、夜の戦闘でも昼間のように戦えるように訓練してあるんだが……。あんたくらいだよ。初太刀を防いだのは……。まあ、それがいいことなのか悪いことなのかは判らないがねえ（鼻の洗浄薬を吸う）恐怖を味わう時間が長くなっただけかもしれないがなあ」

（敵の兵士が闇の中から次々に現れる。その数、二十数人になる）

岡田…「これだけの人数を果たして裁ききれるか？数的に圧倒している側が呼吸をそろえて一斉に斬りかかって来たらどうするよお？」

土方…「確かになあ。どうするよ？近藤さァん？」

近藤…「知れたことだ。斬って、斬って、斬りまくる。隙があれば逃げながらも戦う。そしてブラをゲットする。お前ら生き残れよ。まだクリスマスプレゼントを渡してねえんだからよ。」

土方…「くれるのかい。近藤さんのセンス……。（にやりと笑う）見てみてえな（刀を構えなおす）」

沖田…「どうせ酷えもんでしょうが、見たいですねえ（突きを入れやすい構えを取る）」

岡田…「お互いの遺言は聞いたか？念仏は唱えたか？辞世の句は作ったか？……。そして死ぬ覚悟はできたか？」

（そういつて兵たちに斬りかからせる。6人が一斉に3人に襲い掛

かる。)

近藤…「うおらああああ!! (目の前の相手の懐に一気に踏み込み、つばぜり合いに持ち込む。同時に膝を相手のみぞおちに叩き込む。相手が腹を抑え、うめきながら2、3歩さがったところで、その横にいる敵をなぎ払うように斬る。すかさず腹を抑えている敵を斬る。一瞬で二人を倒す。)・・・次っ!」

土方…「らあっ! (くわえていたタバコを兵に吐き出し、ひるんだところを斬る。斬られて力なく倒れそうになる兵をもう一人の兵に向かって蹴る。味方が倒れ掛かってくるのに気をとられているのを見逃さず、そのまま斬る)・・・甘えんだよっ!」

沖田…「・・・(無言。敵が様子を見ながらじりじりと近づいてくるのを見る。)来いよ」

敵…「・・・(正眼に構えている)チェストお!」

沖田…「・・・(正眼に構えている敵の籠手が動いた瞬間、刀を握っている兵の手に向かって軽く突きを入れる。兵、親指が切られて地面に落ちたのを見る)・・・指一本無いだけで、刀は持てないからなあ(刀を落として親指を押さえてうめく兵を冷ややかに見る。もう一人も同じように親指だけ落とされ、うめく)、二人とも、いい表情でうめいてくれるねえ。喧嘩はこうでなくちゃいけねえ」

土方…「(それを横目で見ながら)てめえ、本っ当にドSだな」

沖田…「そうですよお。土方さんが困ってる姿を見たいんですがねえ。本当は」

岡田…「(感心したように)すごいなあ、お前ら。俺の部下6人があつという間にこんな姿になっちまったよ・・・2人ずつじゃ、手に余るってことだなあ。(そう言うのと、こんどはさらに兵が増える)・・・んじゃあさあ、5人ずつならどうだろうねえ。」

近藤…「ちっ・・・やべえな・・・さすがお妙さんのブラだぜ。レアアイテムはそう簡単にはゲットできねえか・・・」

土方…「5人はさすがにヤバいな・・・」

沖田…「・・・そうっすねえ・・・死にそうですねえ」

武市…「(真選組と岡田の戦いを後ろで見ていたが)・・・どうやら決着はほぼついたようですね。・・・まあこのまま死んでいくのもいいですが安らかに死なれるのも面白みがありません。ひとつ教えて差し上げましょう。我々は数日前から江戸に潜入して、すでに数箇所爆弾をしかけております。」

近藤…「・・・爆弾だと?」

武市…「ええ。テロはイベントで盛り上がっている時に起こすのが一番効果があります。クリスマスなんかはとくにすばらしい」

近藤…「そういえば、映画のダイハードもクリスマスにテロが起こって、それを阻止する刑事って言う話だな。時期的にいま位か」

土方…「伏字くらい使えよ、近藤さん。ハリウッドは権利が煩いばいぜ」

沖田…「大丈夫でさあ。ああいう話どこにでも転がってまさあ。そ

れより、ハリウッドと言えば、実写版のドラゴンボールがどうなるか、そっちのほうに気がなりますぜ」

近藤…「ん、ひどい出来らしいな」

土方…「ああ。逆に見に行きたくなるよな」

武市…「（彼らの会話を聞いて）・・・自分たちが置かれている立場を分かってないようですね。そんな世間話をしている場合ですか？・・・あなたが死んだ後混乱する江戸を誰も取り締まれないでしょうねえ。天誅ですよ。混乱・略奪・・・想像しただけで瞳孔が開いてしまいそうです。」

近藤…「（刀を構えなおす）けっ、ずっと瞳孔開きっぱなしじゃねえか。・・・ま、どうせ武州の田舎から出てきてここまで出世したんだ。畳の上で死ぬよりも、戦って死ぬほうが俺達らしいな」

武市…「ほほう。死ぬのが怖くないとでも？」

近藤…「ふふふっ・・・怖くないねえ。華々しく散れるならむしろ本望だよ。だがトシ、沖田、お前らは生きろ。俺は局長として、戦って死ぬつもりだ。・・・真選組を、そしてブラを頼む」

土方…「なに言ってやがんでえ。武州でガキの頃からつるんで、喧嘩しか能の無え俺をここまで引き上げてくれたのはあんただ。俺あんたに命を預けている。あんたが死ねって言うんなら喜んで死ぬ。だがな、こんな時に生きろって言われて聞くわけにはいかねえ。死ぬんなら一緒だぜ。ブラのこたあ知らねえ。自分でお妙さんに手渡すんだな。てかブラ好きだな、おい！」

沖田…「右に同じでさあ。近藤さん、あんたは俺にとっては局長以上の存在だ。父親みたいなね。命令は何でも聞くつもりでさあ。けど今回だけは聞けないですぜ。（刀を構えなおす）近藤さんのために死にまさあ。俺もブラのことは知らないですぜ」

近藤…「馬鹿どもが。ここで死ぬのは一人でいいんだよつ。てめえらは生きて江戸を守れ！俺のクリスマスプレゼントを受け取れ！俺が全員相手する！おめえ達はさっさと逃げやがれ！！」

岡田…「（近藤のセリフを聞き）さすがは真選組をここまで大きくしてきただけの男だな。その度胸、潔さ、さすがは武士だ。器が大きい。だが、お前一人殺すわけにはいかんな。全員殺す（そう言うつて部下を一斉に打ってかからせようと手を振る）いけ」

第17話

（そのとき、パトカーの音が港に響き始める。真選組のパトカーが次々に港に到着する）

岡田..「・・・なんだよ。ありゃあ・・・」

山崎..「（拡声器を使って）近藤さんく、遅くなりましたく。これでも飛ばして来たんです
が」

近藤..「山崎！」

土方..「（ニヤリとする）ようやく来やがったか」

沖田..「地味な癖においしいところを・・・」

武市..「なんでこんなところに・・・ケーキ屋にいるんじゃないかなかったですかっ」

近藤..「ふふふ・・・あいつは地味だが真選組ナンバーワン隠密だぜ。舐めてもらっちゃ困る。」

武市..「（悔しそうに）出し抜かれましたか・・・」

山崎..「一番隊士から十四番隊士まで全員来ちゃいました。（ラケットを取り出す）みんな車から降りてっ。全員一斉射撃だく！」

真選組隊士…「おうっ！」

土方…「射撃って・・・あいつら・・・まさかっ!？」

(全員がラケットでボールを打ち、次々に敵にぶつけていく。ただし、山崎のボールは土方のほうに吸い込まれるように打ち込まれる)

近藤…「ここぞとばかりにミントンをしてやがる・・・(苦笑する)どこで練習したんだよ」

土方…「山崎っ、てめえっミントンはいいから刀を使えよ!刀をよ!侍の魂だろうがっ!そんな玉で敵を倒したりできるのかよっ・・・痛てっ・・・(次々とボールがぶつかる)わざと狙ってんなっ!・・・痛うっ・・・!」

山崎…「(真剣な顔で)そんなことないですよ。僕がミントンの練習をするたびに殴ったりするから恨みがあるとか、ラケットを取り上げられたとか、そんな私怨で副長にぶついたりするわけないじゃないですか。たまたまです。たまたまっ。この乱打は偶然であり実際の恨み、私怨とは一切関係ありません、なのです。オラッ!くらえっ!オラッ!死ねっ!」

土方…「痛てっ!くそっ(ちらっと沖田のほうを見る)お前何俺にバズーカー向けてんだ!？」

沖田…「いや、便乗しようと思ひましてね。乗るしかない、この世界的なビッグウェーブに、ってやつでさあ」

土方…「狙う相手が違うだろおがよっ!お前何に便乗してんだよっ。攘夷志士を狙えよ!」

沖田..「そうでした。攘夷志士がいるのを忘れてやしたぜ。そつちを始末してから副長を・・・」

土方..「怖えこと言ってんじゃねえ！」

近藤..「よしっ、ラケット部隊はもういい。今度は白兵戦だっ！みんな、行くぞっ（そう言って敵に向かって駆け出す）」

（真選組によって次々と攘夷の兵が倒され、逃げる者も出てくる。）

第18話

武市…「ちっ、これはまずいですね。一時撤退ですよ」（そう言
って逃げ始める）」

近藤…「トシ、総悟。あいつらを追ってくれ。」

土方…「あんたはどうするんだい？」

近藤…「……俺は岡田を斬る。」

土方…「……死ぬんじゃないぜ。総悟、追うぞッ」

（土方、沖田、山崎ら真選組隊士達は逃げる攘夷兵を追撃する。周
りが動く中で近藤、岡田は向かい合って、静かににらみ合っている）

近藤…「岡田よ……もう攘夷とかそんな時代じゃない。昔、あ
んたが人を斬っていたころは『天誅』といわれていただろうが、あ
んたが今やってることは単なる『人殺し』でしかねえ。」

岡田…「わかってるさね。だが、俺にはこれしかねえのさ（鼻洗淨
薬を使う）これしかね」

近藤…「それなら止めるしかないな。江戸を守るため、土道を通す
ためには。ブラを取り返す
ため。刀は人を生かすために振るうものだ。人を殺すために振るう
のであれば……斬るっ！」

岡田…「御託はいい……（居合いの構えになる）てめえも刀で会

話が出るだろ。来な」

（空から雪が降り出す。二人、睨み合いを続ける）

近藤…「・・・っ！」

岡田…「・・・！！」

（二人、同時に駆け寄り、交錯する。静かに雪が降る降る中、岡田がゆっくりと倒れる）

近藤…「・・・悪いな・・・」（刀を鞘に収め、土方達が追撃したほうへ走り出す）

岡田…「（倒れたまま一人つぶやく）ふふふ・・・やはりな。登場シーンとか、登場した話数とか、いろんなところから考えて俺がやられるフラグは立っていた・・・ま、それなりに美味しいところだったからいいんだがね・・・ぐはっ」

（武市、数百メートル走ったところで真選組に追いつかれる）

武市…「追ってきましたか。お前たちがこの場所に来るのも十分計算に入れていましたよ。ほら、御覧なさい。万事屋のみんなも一緒ですよ」

土方…「なんだとお」

（銀時、新八、神楽がいる）

銀時…「（ひざまずき、刀に体を預け、無理に笑顔を作る）おう。」

真選組じゃねえか・・・はあはあ」

土方..「なんだあ。こんな近くでお前らも戦ってたのか。おんなじ港じゃねえか」

銀時..「お前らもって・・・真選組もかあ・・・なかなか厳しい戦いだったぜ・・・ちょっとだけプレイバックしていいか？まあ、興味が無かったらここからしばらくの数ページは飛ばしてもいいんだが。」

神楽..「それではVTR、スタート！アル」

新八..「誰に向かっていっててるんですか！」

第19話

（回想く銀時、新八、神楽、カラクリを追う）

銀時..「ジャンプ返しやがれえ！」

新八..「お通ちゃんく！」

神楽..「アイスは渡さないアルよ！」

（港から少し外れた倉庫付近に到着。カラクリに追いつく）

銀時..「ようやく追いついたぜえ。ジャンプを返してもらおうか。
この機械仕掛けのオレンジがっ」

カラクリ「・・・」

河上..「（コンテナの上に立っている）どうでござったかな。拙者のカラクリ裁きは？」

来島..「いや、最高っスよ！」

新八..「あんたたちは・・・」

河上「久しぶりでござるな。万事屋」

来島..「チャイナ娘、久しぶりッス」

神楽..「ケバいい女。またパンツ見せに来たか？」

来島..「誰がケバいんスカ!」

新八..「ジャンプ盗むなんて、お通ちゃんのインタビューが見たかったんですか!自分で買えよ!」

河上..「いや、拙者はこんなことをしたくなかったのでござるが・
・武市さんの作戦でござって・・・」

銀時..「一体何の用だ?人のジャンプを取り上げて喜ぶ、それが目的か?いぢめる?いぢめる?」

高杉..「(河上と来島の後ろから出現する)違う」

銀時..「・・・てめえは!!高杉」

高杉..「久しぶりだなあ、銀時。そしてメリークリスマスだ(ふつ、とキセルを吹かす)」

銀時..「メリークリトリス」

高杉..「・・・くだらん」

来島..「てめえゝ!高杉様に向かってなんて下品なこといってるんすか!撃ち殺すっすよ!」

銀時..「下品だと?てめえにもついてるだろうが。よく見るといい女だし、俺がいじってやってもいいぜ。うひひひひひ(わしわしと両手の指を動かす)」

来島…「(赤くなる)・・・っ！高杉様の前でっ！」

河上…「ははははは、面白い奴でござるなあ」

高杉…「・・・銀時、お前をここにおびき寄せたのは、お前と一緒に江戸が火の手に包まれるのを見るためさ。この馬鹿みたいにみんなが浮かれた日にな」

銀時…「なんだと？」

高杉…「数週間前から江戸各所に小型の爆弾を仕掛けてある。それを起動させるスイッチがこれだ。これを押したら江戸は火の海。壮大じゃないか。クリスマスらしくていいよなあ」

銀時…「・・・ずいぶん物騒なものを手に持ってるなあ。モンキーに核兵器のスイッチを持たせるくらい危険だな」

来島…「さっきから高杉様に向かってその口の聞き方は何スかつ！(2丁拳銃を発砲する)次は本当に当てるっスよ」

銀時…「(頬にかすり傷が出来る)マトリックスのようによけてやるよ。次はな。しかもこのかすり傷、逆になんか格好良い感じに俺をただけだぜ。主人公は頬をかすられるか、腕をかすられるか、と相場は決まっているんだ。ということは俺は主人公なのか？新八？途中から出てきたのに？」

新八…「こんなときに何わけのわからないこと言ってるんですかっ！」

高杉…「銀時よ。お前も変わったな。白夜叉ともあろう者が」

銀時…「昔の話だ。今の俺が本当の俺だよ」

高杉…「続けさせてもらう。お前はここで死ぬ。俺が殺す。だが、江戸が火の海になるのを見て死んでもらう。攘夷を忘れてすっかり平和ボケになった己の力の無力さを感じながらな。」

銀時…「時代が違うんだよ。それをわかっていないお前のほうが無力だ。一体何になるというんだ？江戸を焼いて？」

高杉…「俺が楽しいからやるんだよ」

銀時…「・・・お前はもう攘夷志士じゃないな。単なるテロリストだ。天人と戦ったところのお前じゃない。お前よりエロテロリストのほうがよっぽどいい。ハアハアできるしな」

高杉…「天人たちに大手を振って街を歩かせ、侍としての誇りと気概を失い、飯を食って出すだけの生き物しかいなくなったこの国は一度滅ぶ必要がある。人の家に土足で上がられ、それでも卑屈に笑っている侍など・・・必要ない！」

銀時…「それでも生きている奴らもいる。誇りを失わず、心に刀を持ち続けている奴らもいる。」

高杉…「もういい。お前にはわからん。」

銀時・・「ああ。わからねえな。お前の意固地に凝り固まった考えは。そのスイッチは押させねえ。
（刀を抜く）」

新八・・「僕もやります。河上さん。勝負です」

神楽・・「私もやるネ。その女、私が相手ネ」

高杉・・「何を馬鹿な・・・まあいい。少しの時間、遊んでやろう。
（刀を抜く）来い、銀時」

（〽回想終わり）

第20話

銀時…「……というわけで散々戦ったってわけだ。あとはお前の想像力で補完してくれ」

土方…「肝心の戦いの描写が無いな！オイ！」

銀時…「まあ、このボロボロの姿を見て察してくれ。いい勝負は出来た。」

土方…「まあいいさ。てめえにしちゃ出来だ。よく時間稼ぎをしてくれた。あとは警察に任せておけ……高杉！てめえ江戸の各所に爆弾を仕掛けてあるらしいが、押したところで逃げられると思ってるのか？万事屋は戦力にならないとしてもここに真選組が集まってるんだぞつ。」

沖田…「これだけの人数がいるから観念したほうがいいと思いますぜえ」

高杉…「逃げ切れるさ。ここはどこだと思っているんだ。港だぜ。（パチン、と指を鳴らす）」

（暗い海にイルミネーションを飾った館舟が浮かび上がる。このシリ阿斯な雰囲気には使わないお祭りのな雰囲気小さいどよめきが起こる）

銀時…「……ずいぶんと賑やかな船じゃねえか」

高杉..「そりゃそうだ。今から江戸が大騒ぎになるんだ。ここからゆっくりと見物させてもらうんだ。これくらいの船じゃねえとな」

(近藤、到着)

土方..「近藤さん・・・無事だったのかい」

沖田..「近藤さん・・・一難去ってまた一難って奴ですぜ。奴が首魁であ。詳しくは万事屋の回想シーンを参考にしてください」

近藤..「便利だな、おい！・・・(回想シーンを参考にする)・・・ふむう。そういうことか。スイッチを押すのを止めるんだ。」

高杉..「いまさら何を。どうやら役者は全員揃ったな。最後に近藤、お前と一度刀を合わせておきたかった。(刀を抜き近藤に近づく)」

近藤..「今日はクリスマスだっ、その夢叶えてやるよ。あの世で岡田と仲良くしな」

高杉..「似蔵を倒したのか。面白い。(激しく近藤に打ち込む)」

近藤..「・・・っ！太刀筋が読めねえ。それにはええ！」

高杉..「防いでばかりでは勝てないんじゃないのか？それが真選組の頭の腕かつ(刀を弾き飛ばす)・・・こんなものなのか」

近藤..「(刀がなくなったので高杉に掴みかかり、背負い投げをする)」

高杉…「……っ！その粘り強さがお前の真骨頂か。時間もない。ここまでだ。決着はいずれ着ける（そう言って近藤から離れる）……遊びは終わった。行くぞ（そう言って河上、来島、武市とともに船に乗り込む）」

近藤…「待ちやがれっ！ブラをかえさねえかつ」

武市…「馬鹿な男です。こんなものが欲しければ返してあげましょう（投げ捨てる）」

高杉…「……下らん。そんなものを欲しがるとは」

近藤…「物がなんであれ、警察の役目は市民を助けることだ。それはまず解決した。次はお前がスイッチを押そうとするのを食い止める！」

高杉…「そっちのほうは無理だな。もう遅い（そう言ってスイッチを入れる）」

（雪が静かに降るなか、江戸の各所で爆発音が響き、一瞬明るくなる。万事屋、真選組、鬼兵隊の全員が江戸のほうを見る）

第20話（後書き）

高杉さん、押しちゃいましたね・・・

そろそろ終盤って感じです。

第21話

銀時..「高杉いっ！やりやがったなっ！空気を読めよ！このタイミングじゃねえだろうが！」

高杉..「くくく。だからこのタイミングなんだよ」

近藤..「くそっ・・・山崎、火消しに電話だ！」

山崎..「はいっ！（パトカーに戻る）」

新八..「いや、みんな、ちょっと待って・・・爆発は起きているけど・・・あれって・・・」

（全員空を見上げる。雪の降る中、いろんな場所で次々に花火が上がっている）

銀時..「なんだよ、こりゃあ・・・」

神楽..「なんだか綺麗アルな」

武市..「（激しく動揺する）・・・こ、これは・・・い、一体どういうことですか・・・」

高杉..「どういふことか俺が聞きたい。あれは爆弾という話じゃなかったのか？」

武市..「た、確かにそうですが・・・なぜ花火が・・・」

近藤…「ふはは。何故かは知らないが爆弾と花火が入れ替わってたんじゃないか？ テンコウ並のイリユージュンじゃねえか」

土方…「冬の花火とは粹だねえ。俺あ、好きだぜ」

沖田…「そうですね。高杉さあん。いいクリスマスプレゼントをありがとうございます。」

高杉…「くっ……」

（次々と花火が上がる。花火をバックに坂本辰馬、陸奥、飛行船に乗って登場する）

坂本…「（飛行船から降り、武市に近づく）いや、ここにおったかあ。探したぜよ。武市さん」

武市…「……っ！ 貴様っ！ これは一体どういうことだっ！ お前が天人と貿易をしたり、他の惑星に行ったり、手広く商売をしているから信用してお前に爆弾を発注したはずだぞっ！」

坂本…「あゝ。実はその話の事で来たんじゃない。せっかく注文してもらったが、違う商品を渡してしもうての。なにしろこの時期は忙しいてかなわん。俺は頭が悪いきに。すまんかったの、わはははは」

来島…「（銃を構える）侍の魂を失ったこの商人風情がッ！ この大事が茶番になったのは誰の責任だと思ってるんスカ！」

陸奥…「(坂本の後ろに控えていたが前に出る) きさまっ、うちの
大将に銃を向けるかっ！」

坂本…「(両手を挙げる) まあまあ・・・陸奥よ、ええんじゃ。お
なご同士でそうやっていがみ合つとるとシワが増えるきにやめとき
や。俺も悪かったとおもつちよるき、こうやって謝りにきたんじゃ。
そのお詫びといつてはなんじゃが、支払ってもらうた代金を返して、
あとはこの特注のクリスマスケーキをみんなで食って欲しいと思っ
ての。美味いぜよお。あはははは」

武市…「そんなことで済むとおもっているのかっ!! (坂本の胸倉
を掴む)」

高杉…「(笑い出す) まあいい・・・今回は失敗だな。これが花火
でなかったら成功だったということだ。いい授業料になった。これ
はこれで面白いさ・・・(真顔になる) 坂本、お前が本気で間違っ
たとは思ってはいない。」

坂本…「いやあ、本当に間違ったんじゃがのう。あはは、あははは
はは」

高杉…「ぬけぬけと言う。いっぱい食わされたな。ケーキはもらっ
ていく。全員撤退するぞ！」

船が動き出す。坂本は商人らしく頭を下げながら見送る。

第22話

土方..「近藤さん、追わなくていいのかい」

近藤..「いいだろう・・・今から船を出しても追いつけまい。しかしこれがお妙さんのブラか。これがお妙さんの胸を包んでいたというわけか。ハアハア」

（近藤の背後に人影が近づく）

お妙..「近藤さん・・・」

近藤..「お妙さん。なぜここに？」

お妙..「かぶき町に真選組の人が来て車に乗せてくれてたんです。危ないから車からでないでくださいって言われてたんですけど・・・」

近藤「そうでしたか。見てください。花火がきれいですよっ。それからブラは取り返しました。命がけでしたよ。これであなたの新世界の神になれますか？」

お妙..「ありがとう、近藤さん・・・って何で人のブラを頭につけてるんです？（パンチが飛ぶ）」

近藤..「うぐう、ね、猫耳みたいでしょ？」

お妙..「なにが猫耳じゃあっ！げしげしっ！死ね！氏ねじゃなくて死ねっ！げしげしげしっ！」

土方…「やれやれ・・・またかよ（タバコに火をつける）あいかわらずだぜ。・・・ふうっ、美味え・・・」

（銀時、坂本に近づく）

銀時…「坂本、本当に間違ったのか？」

坂本…「なにいうとんじゃ。商売人の情報収集力を舐めたらいかんぜよ。わしゃ暴力沙汰は嫌いじゃけの。爆弾より花火じゃ。わざとやったんじゃ。ちなみに鬼兵隊の連中が何かたくらんでるっていう情報はあの人にくれたんじゃ」

銀時…「（船のほうを見る）・・・ってか、ツラじゃねえか？なんで海賊みたいなコスしてんだよ？」

桂…「ツラじゃない。キャプテン・カッターだ」

銀時…「まあどっちでもいいけどよ。しかしよお。鬼兵隊のテロがあるってわかって参加しなかったのか？てめえも攘夷志士だろ？」

桂…「確かに今の世は腐り果てている。が、それを暴力で変えようというのは気に入らん。相手を説得し、納得させる。そうやって世の中を変えていくのが私の攘夷の方法だ。奴とは違う」

銀時…「なるほどねえ。変わったな。お前も。外見も相当変わってるが」

桂…「放っとけ。そしてそのためにはお前の力も必要だ。どうだ銀時、一緒に世の中を代えていかないか？いまなら俺とお揃いのこの

服をプレゼントしようじゃないか。限定一着だぞ。ほれほれ」

銀時..「いらねえよ！つか俺はやめておくよ。攘夷なんて柄じゃねえし、何よりも毎日を生きるだけで精一杯だ。いまは大事なものもあるしな」

桂..「そうか。残念だな。お前にはぴったりだと思ったのだが。なあ、エリザベス」

銀時..「攘夷志士がか？」

桂..「いや、このコスチュームだ」

新八..「（横から突っ込む）そっちかよ！それより銀さん、ジャンプは無事ですか？」

神楽..「ハーゲンダッツもネ。確認するアル」

銀時..「ったく。二人とも現金なやつらだな。ほれ、ジャンプもあるし、ハーゲンダッツもある。幸いこの寒さだから溶けてないぞ」

新八..「良かった。それじゃ銀さん、帰りましょうよ。お通ちゃんの記事を早く読みたいんですよ。それに冬の港って寒くて・・・雪も降ってるし」

神楽..「私は早くアイス食いたいアル」

銀時..「わかったわかった・・・じゃあ、カツーラ、坂本、俺は帰るわ。真選組の奴らも、俺は帰るからよ。じゃあな。いくぞ、新八、

神楽」

新八..「はい」

神楽..「サダハルも行くよ」

新八..「へくしょんっ！・・・寒い・・・」

神楽..「私もネ・・・銀ちゃん何とかして欲しいヨ」

銀時..「・・・しゃあないな。ほれ、マフラーだ。二人で巻いてろ。
(一本のマフラーを2人に巻いてやる)」

神楽..「うおうっ。銀ちゃんが巻いてたから暖かいアルな(はしや
ぎながらマフラーにすりすりする)」

新八..「本当だ・・・でも銀さん、いいんですか？」

銀時..「俺は別にいいよ。ジャンプを取り返したからほくほくして
るぜ・・・行くぞお。じゃあな」

(桂、坂本はそんな3人の後姿を見送る)

桂..「なるほど。あれが奴が何よりも大事にしたいものなんだな。
ふふ、あれでは攘夷に誘うわけにもいかんな。」

坂本..「そうじゃのう。金時のやつ、幸せそうじゃ。ところでかつ・
・いや、キャプテン・カッーラ、いまから船の中でクリスマスパ
ーティーをするんじゃないか、おまんも参加せんか？」

桂..「ふむ。パーティーか・・・エリザベスも一緒ならいいが」

坂本..「よし。決まりじゃ。パーティーのあとは二人して久しぶりに痛飲するかのう。ふふふ、楽しみじゃ。どんちゃん騒ぎじゃ！それじゃ真選組の諸君、これにて失礼するきに」

近藤..「ああ。あなたの機転のおかげで江戸は火の海にならずに済みました。ありがとう」

坂本..「いやいや。注文のとり間違いは商人として失格じゃ。まったくお恥ずかしい。」

沖田..「（小声で）土方さあん、あの連れのほう、キャプテン・カッターって野郎、どこかで見た気がするんですが、気のせいですかねえ」

土方..「さあ。あんな衣装の奴あたくさんいるからなあ。他人の空知、いや空似かも知れねえ。今日はクリスマスだ。深く追求するのは野暮ってもんだぜ。カッターが仮に桂だとしてもな」

沖田..「それもそうですね。空似に違いねえや。最近は疑い深くなっちゃってしまっていけねえや。土方さん、俺たちもそろそろ帰りやしようぜ」

土方..「近藤さんは？」

沖田..「置いて帰ってもいいでしょう。あんな状況なのに連れて帰る、ってのも野暮ってもんでさあね」

土方..「（近藤のほうを見る）なるほどな。あれじゃつれて帰るの

は野暮だな」

近藤..「（お妙と並んで花火を見上げながら会話をしている）いや、でもお妙さんとうちやって雪の降る中、花火を見るとは思いませんでしたよ。それもクリスマススイブに。ところで本当に今日は家にお邪魔してもいいんですか？」

お妙..「・・・（ちょっと照れる）・・・ま、私も車の中から近藤さんが働く姿を見ていましたから・・・で、でも別にかっこいいかと思ったとかそういうのじゃなくて・・・その、ちょっと疲れてらっしゃるでしょうから、まあその、ケーキでもご馳走しようかな、なんて思っただけなんですよ。別にたいした理由はないんですからね。泊ってもいいですけど・・・変なことは無しですよ？」

近藤..「もちろんですとも。（手を握る）さあ、行きましょうか。トシ、沖田、すまないが・・・」

土方..「ああ。わかってるよ・・・よしっ、おめえら、屯所のほうへ帰るぞっ・・・。」

沖田..「それじゃ帰りまさら。頑張れよゴリラ。」

近藤..「ゴリラじゃねえっ！」

土方..「空からは雪が降り、地からは花火が上がるか。そして局長は恋を実らせると。なかなかいいクリスマススイブじゃねえか」

沖田..「土方さあん、どうしたんですかい？早いとこ帰りませうぜ。」

土方・・「ああ」

そういつてパトカーに乗り込む。花火が上がり、雪の降る中、土方の運転で駐屯所へ向かう

第23話（最終回）

屯所へ向かう車の中、土方と沖田は遠くに見える花火を見ながら会話をしている。

沖田.. 「いや、近藤さんもスミにおけねえや」

土方.. 「そうだな。今夜は俺らで鍋でも突付きながら酒でも飲もうと思ってたんだが・・・」

沖田.. 「土方さん、近藤さんを取っていったお妙さんにちょっと妬いてるんじゃないですか？」

土方.. 「んなわけあるかい！」

沖田.. 「そうですかねえ。警邏に出たときあんなにラブラブだったじゃないですか。」

土方.. 「あれは近藤さんの悪ふざけだろうがよ！何考えてんだ、まったくよお」

沖田.. 「そうですか。ま、寂しいのなら俺と一緒に寝てあげませう。今夜は格段に冷えますしねえ。久しぶりに腕の中で暖めてくださいよ」

土方.. 「（赤くなる）んなことできるかい！」

沖田.. 「武州にいたときは寒い日は3人で寝たり、2人で一緒に寝たりもしたじゃないですか。久しぶりに一緒に寝ましようよ」

土方…「馬鹿！あれはてめえがまだガキだったからだろうがよ。てめえは体が弱かったからな。カゼなんかひかれたら迷惑だ。暖かい布団なんて無かったから仕方なく一緒に寝ただけださ。たく、大人のになってそんなことやれるかよ・・・」

沖田…「ま、別にいいじゃねえですか。・・・それより、だいぶ雪が強くなってきましたねえ」

土方…「ああ。こりゃホワイトクリスマス、ってやつだな・・・見ろよ。歩いているカップルたちの幸せそうなこと。部屋に戻ったらいちやつくんだらな」

沖田…「そりゃそうでしょう。」

土方…「今頃、高杉の野郎も雪見酒でもやってるのかもしれない。花火見酒かな。なんだかんだで平和なクリスマスになりそうだな（雪を黙って眺める）」

沖田…「そうですねえ。しかし、クリスマスってイエス・キリストとかいう人の誕生日かなんかでしょう？あの人って何をしたんですかねえ」

土方…「しらねえよ。だがたくさんの人が幸せな気持ちになれる日を作ったんだからそれだけでも偉いもんさ。・・・帰ったら鍋だな」

沖田…「そうですねえ。付き合いませあ」

そのころ宇宙では、ある天人達が地球を観察していた。地球人が平和的な人種であれば、お互いの星同士をスペースラインでつないだり、貿易をしようと考えてのことだ。

天人1…「どうだ。地球人はお互い同士で殺しあったり、今来ている天人といさかいを起こしたりとあまり評判は良くないが」

天人2…「いや。今ここから見る限り、人々は笑いあい、花火を打ち上げ、寄り添っている。平和的な星人だよ。これなら我々の先端技術を悪用したりはしないだろう」・・・のちに地球と貿易を頻繁にして、お互いの行き来が盛り上がり、両方の星が豊かになった友好星のひとつは、このときに地球と関係を持つことを決めたのだった。

土方…「(運転しながら)さっきの話だが、キリストが何をしたか知らねえが、陰でみんなのためになるようなことをやってたんじやねえのか。だからこうやって祝うのも悪くねえよ」

沖田…「そうですかねえ。ほかの星と地球の関係を繋ぐ位じゃないと俺は認めませんがね」

土方…「そうか。駐屯所もうすぐだ。鍋だ、鍋(車のラジオが0時を告げる)・・・お、日付が変わったか・・・(沖田のほうは見ないでつぶやく)メリークリスマスだ。」

沖田…「メリークリスマスですぜ。・・・そういや近藤さんはプレゼントはなにを買ってるんだろうな。」

沖田…「そうですねえ。俺にはアイマスクで、土方さんにはマヨネーズ、つてとこですかねえ。」

土方…「ま、そんなモンだろうな。そういえばさっき頼んでたケーキ、もう屯所についてる

ころだろ」

沖田..「でしようねえ」

土方..「それも食うか」

沖田..「食いやしよう。」

そのころ、長谷川^{マダオ}は仕事が終わリ、初に電話をしていた。

長谷川..「よ、よお。今仕事終わったよ」

初..「あら、お疲れ様。クリスマスなのに大変なのね。寒くなかった？」

長谷川..「いや、ぜんぜん大丈夫さ。外でする仕事じゃないしな」

初..「それでも今は外でしょ。体調に気をつけなきゃ。あなたはすぐに風邪ひくんだから」

長谷川..「そんなことないさ。・・・それよりさ、今日クリスマスだろ。ケーキを買ってきたんだよ。お前と一緒に食べたいなと思ってさ。」

初..「あなた・・・」

長谷川..「い、いや。そのもしかしたらクリスマスだし、お前も別に用事があるってんなら

無理は言わないさ。でも結構お前の家の近くに来てるし」

初..「まあ。そういえば雪が降ってるでしょ。」

長谷川..「ほんの少しな。なぜか知らないが花火もあがってる」

初..「そうね。夏と冬がいつぺんにきたみたいね」

長谷川..「ははは。そうだな。へ、へくしょん!!」

初..「もう、だから言ったでしょ。すぐに風邪引くって」

長谷川..「すまんすまん。でもくしゃみがでただけで、別に風邪じゃないから」

初..「そうやって結局いつも風邪を引いてるでしょ。・・・玄関の前で待ってるから
はやくいらっしゃいな。」

長谷川..「・・・!いいのか?」

初..「当たり前じゃないですか。それに私・・・昨日も今日も予定は空けてたんですからね。」

・・・(小さい声になる)あなたのために」

長谷川..「・・・?ん?なんていった?最後聞こえないよ」

初..「・・・な、なんでもありません!すぐに外に行きますから、早く来てくださいね。」

お風呂も暖かくしてますから」

長谷川・・・・・初・・・すまん」

静かに雪が積もる。そして花火は江戸の町のクリスマスを照らす。

真選組のクリスマス〜終わり〜

第23話（最終回）（後書き）

今回の小説は時期的にもクリスマスネタがいいだろう、ということで作ってみました。みんな楽しいクリスマスになってます。ギャグメインですね。一応戦いのところはシリアスっぽくやってみました。すが、なかなか難しい・・・後は全員のクリスマスの様子を細かく書きたかったんですが、技術がなく書くことが出来なくなってしまいました。マダオは結構好きなキャラなので、最後に幸せな感じにしました。

最後まで読んでいただいてありがとうございました。
もし良かったら感想をもらえるとうれしいです。

そしてよいクリスマスを過ごしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7387f/>

真選組のクリスマス

2010年10月11日17時10分発行